

悲しき追憶

佐々木 高遠

げに呪はしき感冒なりしよ。わが敬愛措かざりし父上を未だ歸もきはまらぬに突如として來り襲ひ承しへに此の地上より奪ひ去りにけり。あゝ忘れもゆせず、大正七年十一月十二日午前二時二十五分つひに永劫の眠りには入り給ひしなり。あはれ生や死やそも何物ぞ。人の世の悲しきまためぞひさり歎かる。追憶の哀切堪へがたきまゝに此の拙き一篇をもしてこひしき父上の靈前に捧ぐさしか云ふ(八、二、二九)

とほく／＼に風消ね行けば馬車のうち心もしぬにうれひはまされ
一陣の風さと掠め遠ざりし深夜の野路に馬車の音高し
たまきはる父の生命を助けよとおびねつ祈る夜汽車の窓に
やうやくに着きし故郷の驛にして倒れんとする足をふみしめ
父は如何にとすなはち問ふにいらへなく先づ上れとぞ叔父はのたまふ
あなあはれ父はもつひに逝きにしかたゞ二時の前にと云ふか
おくつきに今は入りしかたらちをの柩埋むと土かけにけり
たらちをの父の柩は早やつひに懸け土の下またく隠れぬ
父はあらずと今更にしもおもひ泌むふと物問はんと思ふたまゆら
亡父うへの代りをするど幼児に笑み戯るゝ心なりけり
病みてあらばしひて逢はじとのたまひし父の心は思ふにたへず
ひとかにも待ち侘びにけむ臨終の父の心は思ふにたへず

いらたゞしわが眼の前の窓がらす割りくたきてぞ高笑ひせむ
こぼちてむ後を思ひてかにかくにわせざりし身を冷笑ひする
は、のみの母に逆ひの、しれど此のわびしさはやりどころなし
いさかひの後の淋しさ涙して炭火まさぐり母にむかへる

愛 欲

長谷川 公 一

あさましき愛欲絶えず人の子の醜き性の盡くる日ありや
凡衆をあざける心自らを彼等の群に見出す心
このまゝに眼つぶらば僞の象の真に見ゆる日ありや
何物か貴きものを失へる一日の如し汝思はねば

□猫の性慾と人魚の呼吸

黒き猫ひそかに月の陰を行く零るゝ如く霜降るらしも
かゝる夜は海の人魚の鱗など静に照らむ水めく月に

□龍 南 生 活

紺青の海かと思ふ大空に南國の子は浴するかも
よろしけれ微醺の顔を冬の夜の大路の月に光らす時
眼閉づれば潮も聞ゆ玄海の岸の町にて母在ますらむ
(通町)